

一九四八年（昭和二十三年）、古橋広之進
選手の世界記録ラッシュに日本中が沸く
この年、木村涼子は、産声を上げました。

この年は、犯罪専用電話「一一〇番」が設
置され、また時刻を一時間進める「サマー
タイム」が実施された年でもありました。

涼子が物心ついた頃、戦後の復興は急速に
伸展します。好景気に沸く右肩上がりの豊
かな時代に、涼子は青春を駆け抜けました。

やがて日本は最も苦しかった時代を乗り
越え、世界が驚愕するほど急速に復興が進
みます。高度成長期を迎える中、涼子は、
力強い足取りで人生を歩みます。涼子は着
実に人生の足跡を刻みつけていきました。

「長女だったせいか、精神的に強く、世話
好きで面倒見のいい性格でした。皆の喜ぶ
顔を見るのが好きで、いろいろなものをす
ぐに人にあげていました」

一九七四年（昭和四十九年）、涼子は、え
にしを得て伴侶 太郎と家庭を築きます。
流れ行く年月には、雅代、総一郎という新
しい家族も誕生し、温かな団欒の歳月が流
れていきました。

親としての喜びと責任を感じながら、子供
たちの成長を静かに見守ってきました。
活気溢れる生活の中、涼子は、大切な時間
を過ごしました。

「新婚当初の思い出の地、横浜への引越し
を心待ちにし、亡くなる二日前には一緒に
家具を買いに行きました。七年ほど前から
入退院を繰り返していましたが、ガーデニ
ング、料理、裁縫など趣味を楽しみ家族で
数々の旅行にも行きました」

世界が始まった時から、季節は常に巡り、
人は時の流れに生きてきました。そして限
りある命は、生れ落ちたその時より、抗え
ぬ時の流れに立たされています。涼子は、
安らかな世界へと旅立っていきました。

人生を顧みれば、天地を逆さにした心の砂
時計から、思い出の詰まった時の粒が降り
注ぎます。優しさに包まれた人生でした。

「常に前向きで若くして上京してからも、
多くの友人に恵まれ、結婚後も仕事に趣味
に、もちろん家事もしつかりこなし充実し
た人生だったと思います。今我が家の庭に
は、母が育てたピンクの薔薇のアーチが満
開です。今年は何年にも美しく咲いてい
ます」

決して弱音を吐かなかった心の強さ。涼子
が残した大切な宝物。それは家族や友人と
過ごしたその輝かしい日々の中で、ずっと
輝き続けます。

木村涼子 五十九歳
二〇〇八年（平成二十年）十月十日
永眠